Steel Landscape 鉄の点景

大きい方が口径106cm、深さ73cmで最も大きいサイズの五右衛門風呂（長州風呂）。

五右衛門風呂

日本人は無類の入浴好きといわれている。そもそも、入浴の習慣は寺院の布教活動である「施浴（せよく）」から始まったとされているが、たっぷりのお湯に肩までゆったりつかる日本のお風呂は、健康にもよく、気分も開放的になるため、永らく日本人の習慣として親しまれてきた。

現代のお風呂は、温めたお湯を流し込んで満たすものがほとんどであるが、ここでは、水を満たした風呂桶を直接温めて入浴する、俗に「五右衛門風呂」と呼ばれる風呂桶を取り上げお風呂について考えてみたい。

西日本を中心に普及した五右衛門風呂

『弥次さん喜多さんの二人が小田原の旅籠で、据えてあった風呂の入り方がわからない。浮いていた底板を蓋と思い込み取ってしまうが、それでは底が熱くて入れないので、そばにあった下駄をはいて入ってしまう。そして、ついには風呂釜の底を抜いてしまい、大騒ぎになってしまう』

十返舎一九の代表作「東海道中膝栗毛」の一場面だが、ここで登場する風呂桶が、五右衛門風呂である。弥次、喜多二人の失敗はいつものことだが、ここで彼らを一方的に笑ってしまっては、少しかわいそうなようだ。なぜなら、五右衛門風呂はその当時、京都、大阪で普及していた風呂桶であり、江戸での旅籠には基本的には無かったからである。「膝栗毛」によると江戸から出発して、津、大津あたりになって、ようやく五右衛門風呂圏内になっていくとある。

五右衛門風呂が西日本を中心に発達した風呂桶であり、東日本であまり普及しなかった理由は、鋳物を作る技術が広島県で発達していたことにあると考えられている。いわゆる「丸物」といわれる薄物の鋳物の製造技術は、江戸時代から広島地区が他地区より優れていた。その後背地に、古代より良質な砂鉄を産する中国山地があり、山陰地方には「タタラ」による銑鉄を製造する技術が蓄積されていたことが関係しているのだろう。

一方、江戸を中心とする東日本では、木桶が江戸時代中期頃までに十分に普及していた。さらに、江戸の市中では、銭湯の普及により個人風呂が必要なかった。これら二つの要因が、五右衛門風呂を東日本で馴染みの薄いものにしたともいえる。

意外に新しい?!五右衛門風呂

五右衛門風呂の「五右衛門」とは、ご存知、安土桃山時代の大盗賊石川五右衛門がこの中で処刑されたことに由来するものであるが、一般的にイメージする、上から下まで鋳物でできた五右衛門風呂というのは、明治時代の中頃に広島の鋳物職人が考案したといわれている。江戸期いっぱい培われてきた「丸物」の鋳造技術の成果ともいえるが、現在でも、3～4㎜程度の薄さで人が入れる形状のものを作るには、鋳型(砂型)の精密度の確保や、強度維持のための鋳型砂の調合、また鋳型に注ぐ鉄の成分や、その温度管理に苦労を伴う。

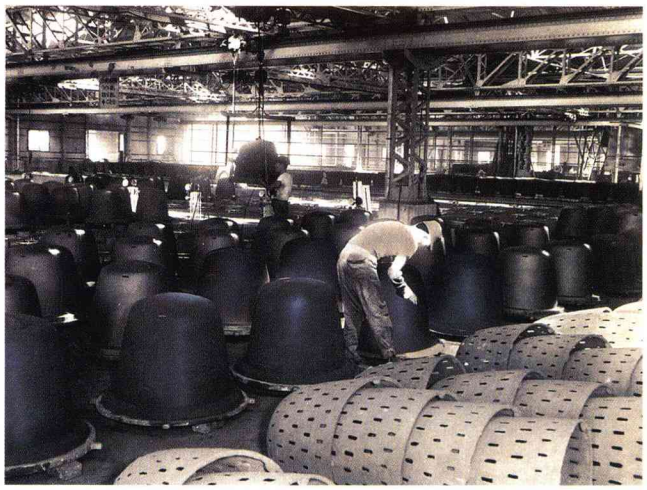
全て鋳物の五右衛門風呂のことを、別名「長州風呂」と呼ぶが、この命名の由来は明治維新で活躍した長州藩にあやかってのことである。長州藩は幕末騒乱の頃、在野世論を自らに有利に形成するために、祇園に代表される京都社交界に多額の資金をつぎ込んだ。そのため、京都町人は一貫して長州びいきであったという。事実、「長州風呂」と名づけたこの商品は、京都、大阪で良く売れ、明治の中頃になっても幕末維新の頃の余韻が残っていたことがうかがわれる。

風呂桶が、全て鋳物でできた五右衛門風呂にたどり着くまでには、いくつかの変遷があった。個人用の風呂桶は、最初は全体が焼物で出来ていた。これは、大きな甕や土鍋のようなもので湯を沸かしていたのであるが、これでは湯沸しの効果が悪い。しかも、大きな焼物では作陶される窯も限られていたであろうし、流通にも不便であった。その後、鋳造技術が発達してくると、火を焚く底部を鋳物で作り、浴槽胴部を焼物で継ぎ足したものに変わっていく。やがて、室町時代の末期から木桶が作られるようになり、お風呂が民衆一般に普及していくのだが、西日本ではこの木桶を鋳物の底部の上に用いた。「東海道中膝栗毛」で登場するのもこのタイプである。一方、東日本では底部、胴部一体型の木桶が普及していき、直火タイプの五右衛門風呂はほとんど目にすることがなかったのである。

なお、石川五右衛門がその子等と釜の中で処刑された時に釜の中にあったのは、お湯ではなく、油であったとされている。これは余談である。

五右衛門風呂の魅力

さて、五右衛門風呂の利点や五右衛門風呂に特有の効果についてだが、木桶の風呂と比較すると、浴槽全体を加熱することができるので沸きが早いと同時に、浴槽全体が温かくなるので、入浴時に体全体が暖まりやすいといえる。また、鉄イオンによる効果もある。鉄を直焚きすることで、鉄イオンがお湯に溶け込み、抹消血管拡張など鉄泉温泉によく似た効果が得られるのである。



五右衛門風呂製造現場。

風呂釜の基本性能としては、鋳物ならではの利点があるのはいうまでもない。鉄は溶かすことで形を作りやすく、一体成型も可能である。また鉄でも鋳物は錆びにくい性質を持っているのも大きな特徴だ。さらに、鋳物は摩擦に強く磨り減りにくいため、五右衛門風呂は丈夫で長持ちし、水漏れがない浴槽といえる。

肩までとっぷりとつかれる形状や、直火でお湯を沸かすという作業にリラクゼーション効果があることも見逃せない。たっぷりのお湯にじっくりとつかる入浴は体の芯から暖まり、永らく日本人が親しんできた入浴形式だ。また、ゆるやかに燃える炎のゆらぎは精神をリラックスさせるといわれている。

また温泉旅館やキャンプ場など、施設の差別化に役立っているだけでなく、野外実習センターなどでは子供達に対して、久しく忘れ去られていた、割り木の体験や焚き火の取り扱いなど、自然教育を入浴といったコミュニケーションと絡めて関わらせていく教材としても見直されているようだ。「里山再生」を標榜する自然保護グループの活動などにも取り上げられている。

カランをひねれば、さっとお湯が出て…。という、現代の風呂は確かに便利である。しかし、焚く人がいて、入浴する人がいて、星空の下で燃える炎のゆらぎを心に映して…。「お湯の効果」にプラスすることの「火の効果」。五右衛門風呂には、入浴本来の魅力があることは確かなようである。

[取材協力　大和重工(株)]